大佛次郎
ノンフィクション全集　第2巻

詩人・地霊
パナマ事件

朝日新聞社

大佛次郎ノンフィクション全集　第2巻（全5巻）

詩人・地霊・他　（第5回配本）　定価 1500 円

発行日　昭和47年1月25日　第1刷
著　者　大佛次郎
装幀者　原　弘　（NDC）
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　東京 名古屋 大阪 北九州　朝日新聞社

©大佛次郎　1972

0395-253882-0042

目次

詩人　五
地霊
汽車の中　二九
テロリストの出発　四三
アゼフの出発　六七
債鬼　九一
パンドオラの函　一一〇
パナマ事件
虹　一三九
外交官　一三七

或る朝　一三七
蜘蛛の糸　一四七
行商人　一五六
危ない橋　一六五
困難の中から　一七五
絶頂　一八五
地すべり
虹よ、もう一度　一九六
魔の山　二〇六
蟻群　二一七
群動　二二八
パンドラの函　二三八
二人の友　二四八
鼠　二五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　夜　二六八
名前を言え
雷　鳴　二七八
死人がしゃべる　二八八
裏おもて　二九八
五　人　三〇八
標　的　三一七
虎とハイエナ　三二七
逆　風　三三八
二つの裁判
アルトンの挿話　三四九
ある裁判　三五八
被告の立場　三六八
彼　等　三七九
沙漠の川　三八九

あとがき　四〇一
解説（「詩人」「地霊」）　四〇五
事項注解　四二四
人名・地名注解　四四七
解説（「パナマ事件」）　四六七
事項注解　四八〇
固有名詞注解　四八四
年表　五三一
地図　五三五

詩

人

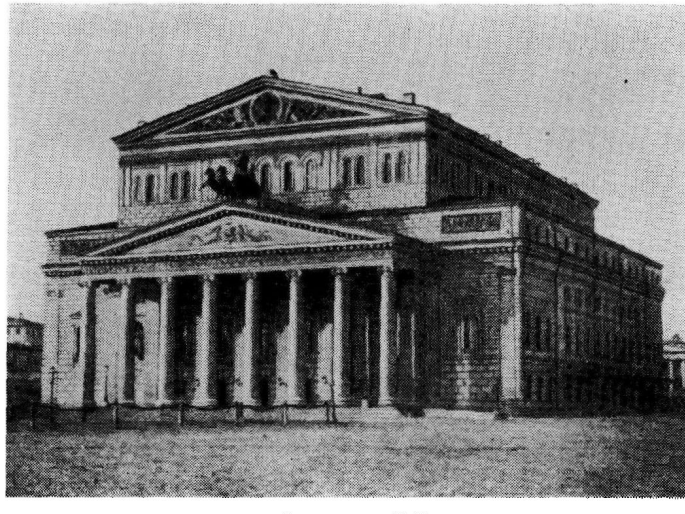
昭和八年五月「改造」に発表

1

劇場は廊下を埋めていた華やかさを開幕の合図とともに扉の奥に封じ入れる。遅刻して入って来た客も外套を脱ぐと、デコレエテ*の夫人を先にして、絨毯の上を爪先で歩いて音もなくドアの奥に消えている。

八時を少し過ぎたところであった。帝政露西亜の千九百五年の、モスクワのボルショイ劇場である。この二月二日の晩には赤十字後援の為の観劇にこの都市の上流の人を集めたのである。総督セルゲイ太公の夫人の主催のもので、太公も来臨することに成っていた。

戸外は極端に寒くて暗かった。露西亜の冬の夜である。劇場へ主人を送って来た馬車もそれぞれ帰った後に、がらんとした広場に強い風が吹いている。公園や市会議事堂などのある、夜は淋しい区域である。息をついている街燈の周囲のほかは、冷たい闇である。いつもより寒さが厳しくて闇の深いほかには、何の変化もない深



ボルショイ劇場

川越図書館蔵書

閑とした冬の夜である。

この闇の中、数町四方に、数人の、一つの目的を抱いた人間がちりぢりに撒かれていた。この大都市の人口の中で、彼等以外の誰れも絶対に知らずにいることである。彼等だけが自分たちの決行しようとしていることを寒風の中で先刻からずっと思い詰めているのである。一人はヴォスクレセンスカヤ広場に向いた市の議事堂のドアの前に立っている。そこは暗いし、風を避けている。もう一人は、そことはずっと離れて、別の道路の上にいる。アレクサンドロフスキー公園の入口に立っているのがそれだ。そこも真暗だ。闇の中で公園の樹が裸かの梢を風に鳴らしているだけだ。別の一人はこの公園の中へ入ってベンチに腰掛けて、外套の背をまるめている。入口に立っている男からずっと離れているし、居ないのか居るのかわからないくらい静かなのである。凝として、木立を騒がす風の音の間に往来の物音を聞こうとしているのである。この男だけは、前の二人が田舎出の者らしく長い外套を着ているのに比べて、外国から来たらしい紳士の風采をしている。

市会議事堂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これだけではない。別の場所にまだ他の人間がいた。これは、二筋か三筋離れた町角に馬橇の上にいる馭者である。それから、最後にもう一人、これは燈火の明るいスラヴァンスキー・バザル・ホテルから外へ出て来て、どこへ行くと云う様子も見えず立ち止るかと思えば歩き、歩くかと思えば立ち止って、何か聞き取れぬものを聞こうとしてあせっているように見える若い女で、厚い外套に身をつつんでいる。

別々の場所に一人ずついる五人であった。これが共通した一つのことだけを心の全幅を傾けて追求している。最早熱情とは謂い得ず冷たく結晶したように見える意志であった。やがて来る筈の激動を目の前に控えて、別の場所に立っている筈の同志へ寄せる最後の愛着と親和の感情のほかには、何の感動も持っていないように見える五人であった。影そのものが、それぞれの場所に、零下十何度の冬の夜の闇に凍りついたように見える。彼等一人から一挙に共同の目的を成就しようとして刻々と迫る機会を待ち構えているのである。

ダイナマイトは、数千里を隔てた巴里で作られた。* 彼等の中の一人の旅行鞄の中に入れて国境を搬び入れて、最初は遠いリガの町に、最近はスラヴァンスキー・バザル・ホテルにいる女が保管していた。充塡して二個を今夜の分に支度したのも女の手である。これを毛布にくるんで用心深くホテルの外へ持って出たのが、七時であった。すぐと、もとから流しの馭者に化けていた同志の馬橇へ乗せて、今夜これを投げる任務に当った同志の二人が待っている場所へ来て、それぞれ手渡した。一人はイリインカ街で待っていて、受取るとハンケチでくるんで手に提げて立去った。この男は、今、市会議事堂のドアの前に立っている。もう一人の男にはヴァルヴァルカ街で邂って手渡した。これと別れたのが三十分前である。この男は今公園の入口に立っている。

二人の持場を町筋を別にして決めたのは、総督の馬車がどの道を通って劇場へ来るか判らなかったからである。来た道路に立っている者が進み出て今度の計画を実現するのである。

どの道を来るかは不明だが、来ることは確実であった。最早開幕の時間は過ぎている。待っても十分か二十

分であった。いや、あるいは、こうしている間に、この風に乗せられて、凍った冬の天地の間に、どこからとなく馬蹄と車輪の音が聞こえて来ないとも限らないのであった。

ダイナマイトを持った二人は刻々と過ぎる時を見まもりながらそれを待っている。ほかの、離れて立っている三人は更にその後のものを待っている。耳が予感に鳴っている。目も瞼の裏に、見えぬ色を見ているようであった。この寂莫とした天地を塞いで轟然と起る響と、木立を顫わせ窓を割る空気の巨大な波動と、遠い町角まで明るくして裂ける火の舌と——夢ではない。馬車は来た。

セルゲイ太公

闇の中に青い色の洋燈が振動に顫えながら近寄って来る。これは、これまで幾度も見て入念に確かめた総督セルゲイ太公の乗用車の特徴であった。モスクワに青い洋燈を点じている馬車は他にない。それから二頭の馬は揃って白馬である。

市会議事堂の入口に立って闇の中を見詰めていた男は、身を起した。

馬車はヴォスクレセンスカヤ広場へ入って来る。これは、彼の持場であった。重大な運命が彼に廻って来たのである。

男の名はイワン・プラトノヴィッチ・カリャアエフと云った。仲間に加わったのは、テロリスト達が前の年の八月、内務大臣のフォン・プレエヴェを暗殺した以前からである。フォン・プレエヴェの暗殺の時にも頻りと自分がその任に当りたいと申出て、この役目は他人に廻されたが、今度は最初から選ばれて、十一月にモスクワに潜入してから、三ヵ月の間、馬車の馭者に変装して、総督の行動を不断に研究した男であった。

カリャアエフは、無口で、沈んだ人間の多いテロリストの中では、変り種に見られている熱情家であった。文学が好きで、いつも新しい詩人たち*の名を口にする。言葉に波蘭の訛りがあるが、声の明るい、すぐ顔を赤くし

て話に熱中する男である。

今度の計画のモスクワの指揮者は後年の「蒼ざめた馬」の作家のサヴィンコフであった。自分がここに紹介する挿話も、彼の回想録*に依ったものであるが、サヴィンコフはこの晩に先立つ数日前にカリャアエフに会った時の話を伝えている。

カリャアエフは死期が迫ったのを既に感じている様子であった。この自覚から、絶えず神経的な興奮状態にいた。この数日間ほど、彼が党に対する愛着と熱情とを口に出して云ったことはない。

私は我々が暗殺を決行すると決議した一月末に、当時まだ辻馬車馭者の服装のままでいた彼と会って話したことがあった。ザモスクヴォリエチェ区の薄汚いレストランで話したのである。カリャアエフはめっきり痩せていたし、鬚を蓬々と生していた。澄んだ色の目も奥深くくぼんでいる。紺色の上衣に赤いスカーフを襟に巻いていた。

「ひどく疲れているんです。」

と、彼は自分のことを云った。

「神経が篝のように成っているんですね。精一杯なんです。けれど、首府でウラヂイミルを、ここでセルゲイをやれれば……。そんな日の来るのを待っているんです。考えて御覧なさい、七月十五日、一月九日*、それから、すぐと、この二つなんだ！　僕は随分待っていた。それが革命なんだ。自分が見とどけられないのだけが残念だが。」

ちょっと黙り込んでから、また云った。

「モイセイエンコは倖せですね、あの男は冷静にやれる。僕にはそれが出来ない。セルゲイをやって了ってからでないと楽になれないのです。（中略）失敗したら、どうするか？　あなた、どうするか知っていますか？　僕は日本人の流儀で始末したいと思っているんです。」

「どう云うんだって？」

「ハラキリですよ。」

彼はこう云った。*

総督の馬車は闇の中から輪郭をあらわした。馬具の色

も見える。これは白色なのがセルゲイ太公の馬車の特徴である。カリャアエフは闇を透して馭者の顔を見た。幾度か間違いのないように見て記憶して置いた太公の馭者ルウヂンキンの顔である。カリャアエフにはもう神経の興奮はない。冷たい意志が厳然と腰を据えているだけである。今は彼に比して冷静な同志の誰れを羨もう。彼自身が待っていた「楽になる時」が目の前に来たのである。

毛布にくるんだ爆弾をさげたまま、真直ぐに彼は出て行って馬車を迎えた。爆弾を持った手を肩より上へあげた刹那に、青い洋燈の微かな光の中に、太公の姿が見えた。モスクワ総督セイゲイ太公と、その他に太公妃、それから稚ない男女の子供の顔であった。

2

はなればなれの場所に立って逃走の準備を遂げながら同志の者が今か今かと待ち構えていた爆音は遂に聞こえて来なかった。

総督の馬車の来たことは、公園の附近にいる者には知れていた。カリャアエフはどうしたのか？

爆弾が不発だったのか？

いや、そうでない。馬車はボルショイ劇場の前に横付けになった。セルゲイ太公は、人々の出迎えを受け、夫人たちを従えて劇場の内部へ入って行った。

風だけが、相変らず暗い空に吹いている。公園のベンチに待っていたのは、指揮者のサヴィンコフであった。カリャアエフは歩いてそこへ来た。

「已むを得なかったと思います。」

と彼は云った。

「ちいさい子供たちを、……誰れが殺せますか？」

カリャアエフは興奮に蒼ざめていた。殆ど真直ぐに口もきけない様子であった。

しかも、彼はこの失策が如何に危険極まりないものだったかを弁えないでいるのではない。カリャアエフは既に命を失っている筈なのだ。自分の命だけではない、爆弾を持って総督の馬車に迫って行って、よくぞ看破され

ないで済んだ。カリャアエフが逮捕されれば、同志の計画そのものが覆されるる。セルゲイ太公の暗殺は遂に不可能のことに成るのであった。

指揮者のサヴィンコフ自身が事の意外に茫然としていた。憤怒が、冷罵が、絶望が一度に感じられた。しかし、強い自制から、カリャアエフの採った措置を進んで承認した。

「それは弱った。」

口をきいているのは、まだ落著を回復していなかったカリャアエフであった。自分の失態の重大さを感じていながら、同時に事の已むを得なかった理由を納得して貰おうとして焦っているのである。幼い子供は、どんなことがあっても殺せないのだ。こう云うかと思うと、こみ上げて来る激情に言葉もしどろもどろに成りながら、太公の家族も共に殺す決議がしてあったのなら自分も躊躇なくやった筈だとも云った。この言葉はカリャアエフがたった今潜って来たばかりの鋭い遭遇に深く触れていた。事実、彼は、太公と一緒に、幼い子供たちを見ようとは全然考えていなかったし、子供たちの姿を見た時は凡そ事の意外のあまり、茫然として了ったのは争われない。いや、それよりも、爆弾を投げつけようとして上げていた手がその刹那から急に動かなくなったばかりか、自分で意識する前に降りていたのだから、若し、予め同志の決議で子供たちも容赦するなと聞かされていたとしたら、勿論そんなことはなかったのではないか？

カリャアエフにとっては、その瞬間に自分の決定した態度以上に自然なことはなかったのである。その場を離れてから自分自身が不安と疑惑を感じたが、実はそれである。そう成ると精神は激動に揉まれるばかりで、同志の前に立って事の已むを得なかった理由を幾らもがいて言葉を替えて説いても決して明瞭に出来ないのである。

そこへ、公園の外に立って、やはり爆裂弾をさげていたクリコフスキーと云う男が来た。この男は太公の馬車がカリャアエフの前を通ったのを見ていたから、事が破れてカリャアエフが捕えられたとばかり信じていたのである。

指揮者のサヴィンコフは一番冷静だったので、あるいはカリャアエフが太公妃の馬車を太公のものと誤認して

実は太公が乗っていなかったのではないかと疑い初めた。充分研究したつもりでいるが、こんな風の探索の遺漏があるとすると、次の機会に回復の出来ない失策の原因ともなる。一度失敗すれば再挙を計ると云うことは全然不可能なので、如何なる場合にも的は機械のように正確に見さだめて置かなければならないのである。

「セルゲイは乗っていたのだね？」

と、彼は訊いた。

「いた。」

と、カリャアエフは答えた。

サヴィンコフは、すぐに、これを人に確かめに劇場の方へ歩いて行った。総督が夫人並びに親戚の子供たちと一つ馬車で来たと云うのは、カリャアエフの言葉のとおりであった。

サヴィンコフが劇場から引返して来てから三人は河岸に沿って、どこへ行くと云うあてもなく歩き出していた。

カリャアエフは、サヴィンコフと並んで歩いている。首をうなだれているが、爆裂弾を片手に提げたままであった。遅れがちに歩いていたクリコフスキーが急に立ち止ったので、サヴィンコフが振返って見ると、驚いたのは、クリコフスキーが傍にあった花崗岩の柱にもたれて、倒れるばかりに成っていたことである。

サヴィンコフが歩み寄った時、

「これを……これを取ってください。」

と、クリコフスキーは突然に両手でさげている爆裂弾を示しながら喘いだ。

「落しそうです、これを！」

サヴィンコフは狼狽えながら、落す前に受取った。

カリャアエフでなく、このクリコフスキーの方が喪心しかけていたのである。茫然と立ちすくんだまま、暫く歩くことも出来なかった。少し前に、自ら志願してテロリストの仲間へ加わって来た人間であった。誰れの胸にも暗澹とした感じがあった。カリャアエフの方が反って気力もしっかりして見えた。芝居の終る頃、自分から申出て、劇場の附近へ引返して行ったのも彼だけであった。

彼は総督を見て来た。総督が夫人や子供たちと馬車へ乗ったのを見とどけて再び空しく帰って来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com